

大寄おおより小寄

真宗大谷派
小松教務所

〒923-0904

小松市小馬出町 26

TEL 0761-22-0555

発行者 池守 章

編集 小松教区教化委員会

テレビ・ラジオ・執筆などでご活躍の稲垣えみ子さんの対談を前回に引き続き掲載します。福島県原発事故をきっかけに、節電生活。50歳で朝日新聞を退社。ひと月の電気代が150円。そんな稲垣さんの魅力に触れてみたいと思います。

稲垣さんは、大変面白いワードを使われています。例えば、冷蔵庫を「いつかの箱」(『寂しい生活』)であったり。なるほどと思ってしまうのですが、物を手放して「無いことの自由」と書かれています。わかるようではない部分なのですが。

稲垣 それについては、本でも繰り返し書いていますが、現代の豊かで便利な世界を生きている私たちは、いわば「スパゲティ症候群」なんじゃないかと思うんです。重病人や重いけがを負った人が、

人間の相

すがた

元 アフロ記者

稲垣 えみ子さん

(地獄・餓鬼・畜生)後編

病院の集中治療室で、数多くの管に繋がれて生きている状態のことです。管に繋がれていないと死んでしまう。逆に言えば、繋がれていれば安心なんです。でも寝たきりの状態で動くこともできない。人間の尊厳を考えたとき、それはどうなんだろうと議論されたこ

とがあつたんです。私も以前はスパゲティ症候群だったんですね。家電や物をいっぱい揃えて、そういう便利なものがないと生きていけないと思つて、

由というのはお金をいっぱい稼いで、欲しいものを買って、素敵な家に暮らして、豪華な旅行することだと思つていました。でも、どうも逆だったんじゃないか。本にも書きましたけれど、私は実は自由を手に入れようとして、逆のことをしてきたんですね。何かを手に入れたことが自由なんじゃなくて、何もなくてもやつていける自分に気づくことが自由だったんです。

体験を通して実感されたということですね。よくわかりました。

稲垣 もつと言え、家電だけでなく、いろいろな物を持ちすぎでいたことにも気づいた。

「捨ててみたら、すでに足りていた」(『寂しい生活』)という言葉もありました。

稲垣 そうなんです。実際手放していったら、実は充分すぎるものをすでに持っている、それどころかむしろ余っているじゃないかと。で、たくさんあつた洋服や物を人にあげたんですね。そしたらみんなに喜ばれて、すごい友達が増え

抜いていく行為だったと思います。でも、やつてみたら案外大丈夫じゃないかと。で、ついに洗濯機という管も、冷蔵庫という管も抜き、最後はベッドから起き上がった、自由に歩き出せるようになった。で、私は「これが自由なんだ」と思つたんです。それまでずっと、自

いけるような気がします。

たんです。頂きものも、自分です
でに足りているから近所の人にお
裾分けすると、またお返しに何か
を頂いたり。急に全てが逆回転し
始めた。自分の欲が小さくなると、
全てが余ってくるから人にあげる。
そうすると周りがみんな親切に
してくれるんですね。居心地がい
いわけです。足りない足りないで
やつていたときは、自分は一生懸
命やつているんだけど、金正恩で
はないですが、どんどん疑心暗鬼
になつてくるんですね。誰かが自
分よりも得しているんじゃないか、
誰かに不当に何かを奪われるん
じゃないかと思つて、どんどん孤
独になつていく。

それが、自分は足りていると気
づいたときに、変わったんですね、
世界が。

わかるような気がします。気
がするだけなのかもしれません
が。

稲垣 そこは、本当にちよとし
たきつけというか、勇気ですよ
ね。あと経験だと思えます。小さ
な経験が面白いとなると、続けて

『魂の退社』で日本は会社社会
であると書かれていました。ど
うしても仏教の方へ考えてしま
うんですけど、人間の相（すがた）
を地獄・餓鬼・畜生と教えられて
います。三悪道とか三途ですね。
三途の川の三途です。

稲垣 そうなんですか。

畜生は、傍生という意味で、家
畜を表します。つまり何かに寄
りかからなければ生きられない。
さらに言えば、責任を他に押し
付けている。社会が悪いからと
か、誰かのせいで不幸になった
とかですね。会社社会というの
は、この畜生を自覚された言葉
なのでしょう。それで、退社後に
会社に依存していたということ
に気づいた箇所を読んでいて、
私たち（僧侶）はお寺のしがらみ
に繋がれていると思つていたの
ですが、実はお寺に寄りかかっ
ているんじゃないかと。地獄は
無智無明の苦しみ。餓鬼は飢え
ている。その餓鬼にも全く食べ
物がない世界と、実は有り余る



食べ物がありませんが、なお足
らない世界があります。稲垣さん
が言われるとおり現代社会その
ものです。稲垣さんの著書を読
んで、地獄・餓鬼・畜生をはつき
りさせていただけました。

もうひとつお聞きしたかった
ことがあつて、孤独とか人間の
苦しみをどのように捉えていま
すか。

稲垣 仏教では孤独をどのよう
に捉えているんでしょうか。

「代わる者有ること無し」と
か「独生独死独去独来」など言い
表すのですが、人の中にあつて
なお孤独ということでしょうか。
だから、一人ぼっちというのは

常磐会館報恩講

9月30日～10月1日

9月30日(日) 18時～19時30分 御伝抄拝読
10月1日(月) 9時30分～15時 法要

講師 安原 晃氏 (三条教区安浄寺)



本当の孤独ではないんでしょう。

稲垣 なるほど、そういうことと言えば、私はかつて、みんなの中にいる孤独だったんだと思います。会社でみんなと働いたり飲みに行ったりして、すごく賑やかな中にいたんです。でも、実際孤独だったような感じがするんです。今思えば、それは会社が悪かったわけでも同僚が悪かったわけでもなくて、自分が常に「足りない」と感じていたからなんです。特に出世欲が強い人間ではなかったとは思いますが、それでも会社では、自分が人よりも優れた仕事ができる存在でありたいと思っていたし、あるいはプライベートでも、人よりお金を持っていて、いい生活ができているとかですね、つまり。自分は常に人よりも上にいたかった。今もそれは必ずしも悪いこととは思っていない、生きるモチベーションでもあるわけです。そういう欲があるから努力する。特に若いうちはそういうことも必要だと思います。でもそれって、まわりが全部敵なわけですよ。友達にしても、本当の本音を言えば、自分より少し下でいてくれることのほうが満足なわけ

す。つまりはいつも、もつともつと上を目指さないと幸せにはなれないと思っていた。そのことが、本当の孤独ということじゃないかと思えます。

現在は変わりましたか。

稲垣 先程も言いましたけど、「足りている」となったら、敵がいなくなつたんですね。雲散霧消した。

で、気づけば、今会社を辞めて給料がもらえなくなつたのに、お金の面とか不安がないんです。持つてない方がリッチなんです。抱え込もうとしない方が友達も増えて、で、友達がいれば結局人生って幸せじゃないですか。お金は手段であつて、目的ではないじゃないですか。で、うも、持つてない方が友達が増えてやすいんですよ。一人暮らしなんですけど、孤独じゃない。前の孤独とは全然違います。

最後に稲垣さんの著書を読みながら、ふと源信僧都の「我、今帰する所なく孤独にして同伴なし」の文が思い浮かびました。無間地獄の罪人が発した言葉です。現代

人の誰もが抱える問題を指していると思います。

稲垣 わかる気がします。それって悪人のことではなくて、みんなが良かれと思つて一生懸命生きていて陥ることだと思えます。幸せになろうと思つて一生懸命の結果が、敵だらけということから抜け出せないでいるんだと思います。

禅の「捨てることで自由に生きられる」に近いことなのかもしれませんが、私自身実際のところ本当に偉いわけでもなんでもなくて、言うほどたいしたことやってるわけじゃないんです。ただ手放してみたら気づけただけなんです。

(終)

【1月10日 於 都内某所】

稲垣えみ子 いながきえみこ

1965年愛知県生まれ。
一橋大学社会学部卒。朝日新聞社入社。大阪社会部、週間朝日編集部などを経て論説委員、編集委員をつとめる。
50歳で退社。著書に『アフロ記者が記者として書いてきたこと。退社したからこそ書いたこと。』(朝日新聞出版)『魂の退社』『寂しい生活』(東洋経済新報社)ほか



真宗 Q & A

Q 前号に、「浄土真宗」という言葉は、「浄土こそが真実の拠り処です」という意味だとありましたが、浄土とはなんですか。

A 「浄土」とは「あの世」のことではなく、生きとし生けるものを救わずにはおかれない阿弥陀仏の大悲の本願によつて建てられた国土をいいます。『仏説阿弥陀経』では「極楽」と表現され、「その国の衆生、もろもろの苦あることなし」と、すべてのものの苦しみのない世界であると説かれています。

その苦しみとはなんでしょうか。苦しみの世界を「地獄」といいます。源信僧都の『往生要集』には、地獄の在り様が「我、今、帰するところ無く、孤独にして同伴無し」と示されて、空しさや孤独を抱えて生きるすがたが人間の根本的な苦しみであると教えられています。

浄土も地獄も、「南無阿弥陀仏」とお念仏申すところに出遇わせていただく世界です。浄土とは、私たちに苦しみを抱えて生きるほかない人間のすがたを気づかせ、生きて在ることの尊さと平等に目覚めよと呼びかけて止まない、阿弥陀仏の本願がはたらいている世界なのです。

小松教区教学研究室

『郡中学舎』研究員

柿原 勸

国立ハンセン病療養所

大島青松園交流研修会

小松教区解放運動推進専門部会主査 佐竹 融

国立ハンセン病療養所大島青松園は、香川県高松市の北東、フェリ―で20分ほどの「大島」という面積わずか61ヘクタールの島にあります。小松・大聖寺教区では毎年交流研修会として大島を訪問しています。

私はこの研修会に参加するまではハンセン病問題をどこか他人事として感じていました。

国を主体とした感染者の隔離政策、それに伴う感染者の人権はく奪、そしてその政策の一端を担っていた大谷派教団。一面を切り取って物事を見たならば問題は過去の出来事で終わってしまいます。そのように私はハンセン病問題を捉えていました。

研修会に参加し、入所者の方との交流や園内の建物を見て周る中で初めてハンセン病問題は今もなお解決されずに残っているということを実感しました。

ハンセン病問題は過去の話ではありません。現在も苦しんでいる方がいます。それは入所者だけでなく、その遺族や近親者等も含まれています。

2018年4月末現在入所者数は56名で、平均年齢は84歳と聞いています。高齢化が進み、入所者が少なくなること療養所の維持も困難になっています。

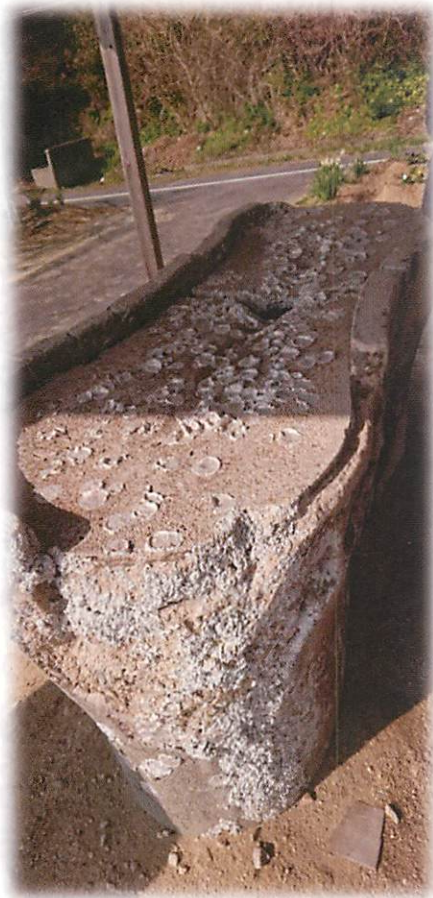
この研修会は、国や教団、この社会にいる私たちが犯した差別への償

いではありません。償い切れるはずありません。過去の出来事を無かったことにせず、今も問題に向かい続けなければならぬという先輩方の願いが、この研修会に込められています。

今だからこそより多くの方に参加して頂き、共に現代を生きるものとしてハンセン病問題に向き合いたいと思っています。



モニュメント「風の舞」 亡くなられた方の遺骨は、納骨堂とこのモニュメントにわけて納められている。モニュメントの後ろからは高松の町を展望することができる。海によって島と町が遠く隔たっていることを強く感じた。



↓集合写真 大島の船着き場にて今年は小松・大聖寺合わせて9名が参加した



へ解剖台 かつて療養所内にあった解剖台。長い間、海に棄てられていたためフジツボが張り付いた様な痕が付いている。当時の入所者は断種や堕胎の強要など非人道的な扱いを受けていた。恐らくはこの解剖台も施術の際に使われていたのだらうと思うと胸が詰まる。

自宅訪問

入所者のご自宅を訪問させていただいた。世間話や趣味の話などをしていると、一体私と何が違うのだろうか考えさせられる。きっと何も変わらない。ただ、笑顔の奥には多くの苦しみと悲しみを今なお抱えているように感じられた。



交流会

入所者との交流会。毎年、北陸の海の幸をお届けしている。今年は小松の塩焼きそばを提供したところ大好評だった。今までは入居者の夕食後に交流会をしていたが、入所者の高齢化に伴い参加者が減少していた。今年は時間を昼間に変更したところ去年よりもたくさんの方に参加していただけた。



入所者からのお話

自治会長の森和男氏より園の歴史を通して、入所者の視点からハンセン病問題をお話していただいた。将来、入所者がいなくなった後のことに関して法律には書かれていない。森会長は何とかして大島青松園を残したいと考えていると話されていた。



【教区教化事業のご案内】

◇日曜講座 9時30分

【9月】2日 廣島 伸治氏

9日 佐々木 浩然氏

16日 加藤 正現氏

【10月】7日・14日・21日

講師未定

◇十二日講 9時30分

講師【9月】佐々木 五六氏

第二組稱名寺

【10月】田畑 都氏

元全国推連協会長

【11月】五辻 信行氏

福井教務所長

【12月】田中 昭親氏

第二組淨昭寺

◇常磐会館報恩講

9月30日・10月1日

詳細は下記表記

※会場の表記のないものは

すべて常磐会館

◇詳細につきましては小松教区
までお問合せ下さい

うららのお寺

本廣寺 ほんこうじ

小松市粟津町

粟津温泉街の中ほど、老舗旅館の角を折れて小路に入ると、「乾山本廣寺」の寺標が眼に入る。石段を上り山門をくぐると、見事に咲きそろった種々の紫陽花が出迎えてくれた。住職さんは、「ダンスパーティー」「ソレイユ」「雨に唄えば」など素敵な名前を次々と教えてくれた。おばあちゃんを外に連れ出すために栽培を始めたという。温泉客や地元の方が、紫陽花を観に、よくお寺に立ち寄るそうだ。

乾山にお寺が開基されたのは貞享二年（1685）であるが、一度途絶え、寛政七年（1795）、木場村で再興。吉崎「本光坊舎」に由来する「本廣坊」と号した。嘉永三年（1850）、粟津乾山に復し、明治十二年（1879）、本廣

寺となった。

大正から昭和にかけて、北陸の各温泉を結ぶ鉄道路線「温泉電軌」があった。当時、北陸本線粟津駅から温泉電軌に乗り継いで粟津温泉へ行き本廣寺の蓮如忌にお参りしてから、また電軌で山代温泉に向かい、大聖寺川を川下りして吉崎で御影道中の到着を待つという参拝ルートがあり、楽しみにしていた人々がたくさんいたそうだ。

今、粟津温泉は、「開湯1300年祭」の町興しが盛んだ。毎月、お寺に子どもたちが集まり町の壁新聞づくりをしている。また、住職さんは、粟津に伝わる昔話の



編集後記

『大寄小寄』をお読みいただきありがとうございます。▼前号より『真宗 Q&A』をはじめました。また、2号にわたって稲垣えみ子さんのインタビューを掲載しました。▼みなさんに、「読みたい」「多くの人に読んでもらいたい」と思っていただけのように、編集委員は試行錯誤しています。ご意見、ご感想を頂けるとありがたいです。▼部数に余裕がありますので、教務所までお問い合わせください。より多くの方にお配りいただけるとうれしいです。和楽

掘り起こしをしていて、その語り部活動もしている。町興しと一体となってお寺の活性化に努められている一端をうかがうことができた。

